

竹中 遥香
TAKENAKA Haruka



骨をまく

キャンバスに油彩、リトグラフ、洋紙、鉛筆、木、
アクリル板、その他



骨をまく

自身の制作では主に日常で感じた変化を扱い、自らの心の機微を基準とした変化に対する苦しさの根源やその苦しさを生み出す構造を観察し、それらを単純な形、線、色を用いてドローイングをする作業を繰り返しながら、作品を通して人間や動物など現代を生きる生物の瞬間事の生命の軌道を表現する方法を模索している。

現代を生きる私たち人間にとって、日常の中で苦しさを感じる瞬間とはどのような時だろうか。普段の当たり前が崩れ、安定した状態から不安定な状態に変わるとき人は「苦しさ」を感じるのではないだろうか。例えば、家族や友人、恋人と作り出す居心地の良い環境。よく訪れる場所や家の近所にある見慣れた景色というような、私達が心の拠り所として信頼しきっている物事が流れ続ける時間によってその形を大きく変化させ不安定な新しい形となった時、そのものへの執着が悲しさや心許なさを引き起こし、私達は苦しさを感じてしまう。仏教では、「この世に移ろわないものは一つとしてない」とし、すべてのものは移りゆく性質であることを説いている。他にもギリシャの哲学者ヘラクレイトスの「万物は流転する」「同じ河に二度入ることはできない」も同じような真理について説いており、人々が古来からこれらの苦しみについて悩み、思考し続けていることが窺える。生きることは苦しいことだと言うように、悩み苦しむことは生きている間ずっと付き纏い続けるものであるが、人々の悩みや苦しみはその時代を写す鏡となり、追いかける事で目に見えない生命の形がはっきりと現れる。

今回の「骨をまく」という作品は去年の9月に祖父を亡くしてから、海に散骨をするまでの日常と離れた経験をもとに制作を行っている。仕事として日常的に死と関わっている人、散骨する乗船時の波の揺れ、ずっしりとした袋の重さ、撒いた後あっという間に海に消えていった白いもやなど、この期間に体験した記憶の一部分を形ある物質に置き換え、額に入れて保存することを制作の目的とした。

墓の役割には、故人が亡くなった後もこの世に存在していたという確かな証明と、ある意味これからも生きていく家族との関係性を継続し続けるものがある。存在していたことを証明する物質、記憶、感触の形を提示し、作品として保存しておくことでこれから日常の中でふと蘇る記憶を頼りに祖父が死んだことで生まれた不安定な新しい形を受け入れることができるのではないかと考えた。